

## 自由を求める者とキリスト教

奨励	山田 史郎〔やまだ・しろう〕
奨励者紹介	同志社大学副学長 同志社大学国際連携推進機構長 同志社大学文学部教授
研究テーマ	アメリカ合衆国の移民・民族・人種の歴史

兄弟たち、あなたがたは、自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を、肉に罪を犯させる機会とせず、愛によって互いに仕えなさい。律法全体は、「隣人を自分のように愛しなさい」という一句によって全うされるからです。だが、互いにかみ合い、共食いつているのなら、互いに滅ぼされないように注意しなさい。

(ガラテヤの信徒への手紙 5章13—15節)

## 新島襄の自伝

2013年度が始まって3カ月が経ちましたが、今年は何か、今までの新学期の始まりとは違った、特別な始まりのような気がしました。今出川キャンパスの整備もほぼ完成しました。昔の同志社中学があったところのキャンパスを知る者にとっては、驚くほど新鮮な外観のキャンパスになりました。そして今まで京田辺にいた多くの文系学部の1、2年生がここに集いはじめ、学生の活気がみなぎっているように思えます。折しも、テレビの大河ドラマの主人公が同志社の関係者ということもあり、その人物に関する特別展示が大学内外で催されています。何か、本当に、同志社に新しい時代の到来を予感させる春学期になりました。こういう特別な年度の春学期のチャペル・アワーでお話しすることに、大変光栄な気持ちの高ぶりを感じています。ですから、新しい同志社のスタートということで、137年前の1875年に同志社英学校が始まったときのことと、今を重ね合わせたくくなります。

さて、皆さんご承知かと思いますが、3月に岩波文庫から、『新島襄自伝』と題した書物が刊行されました。今年は、新島襄生誕170周年だそうなので、自伝の刊行はタイムリーかもしれません。新島はちゃんとした、いわゆる自伝というものを残していないのですが、この書物では、生まれてからアメリカ入国までの足跡を振り返った半生記がその他のさまざまな紀行文や日記とともに収録されていて、自分を振り返る新島の姿を知ることができます。

新島は、今の群馬県の安中藩の江戸屋敷に詰める土族の子でも、父は藩邸のなかで書道の先生をしていました。今で言えば地方公務員というか公立学校教員というようなこの仕事を、普通でいけば新島は受け継ぐことになったのでしょうか、幕末の激動の時代、彼は父親の仕事を継ぐことが嫌で、そもそも藩主にご奉公することに失望し、出仕に嫌気がさします。江戸湾でオランダ軍艦を目にして、脳みそがとろけ出るほどの強烈な衝撃を受け、外国の知識を吸収したいという欲求が生まれます。これとはほぼ同じころに、アメリカ合衆国の歴史や政治について書かれた本や、天地創造について書かれた聖書の物語も読みます。こうした知識をおとして、外の世界へのおこがれとともに、天上の神への畏敬の念を持つようになります。そしてまた、蒸気船に乗って航海する機会を得て、そのなかで精神的な視界が大きく開けて、自由への新鮮な思いが心のなかに満ちてきます。こうして自由を手に入れたい、海外に赴きたいという強い願望が抑えがたいまでに頭をもたげます。

しかし他方で、両親や祖父に対する家族としての愛情で胸が締め付けられます。国外脱出という国の掟を破る大きな罪の意識もあります。そうした罪を犯すことで祖父や両親を悲しませ、天不祥の汚名を着せることになるという気持ちも強い。そういう家族へのしがらみや身分制社会の不自由をあえて越えていく勇気を新島に与えたのは、そうした世俗の束縛を越えた天の神との結びつきの自覚でありました。見えざる神の御手が必ず自分を導いてくださるとの思いによって、新島は函館からの脱国を決意し、敢行します。

もちろん、こうした自伝的記述は、アメリカの敬虔なキリスト教徒に読んでもらうために英語で書かれたものでもあり、あるいはまた、後に洗礼を受けて、立派なキリスト教徒になってから書かれたものでもありますから、自由を求める脱国の決意を促したキリスト教の役割をあまり素朴に受け取ってはいけなないでしょう。しかし、自分の身を縛り付ける世俗のしがらみから脱出する際の自分を、キリスト教の神との結びつきで振り返るといふ自伝的記述は、私のように西洋の歴史や文化を研究する者が何度も遭遇する興味深い歴史的事実です。

## アフリカ人奴隷イクイアーノの自伝

今日、新島襄の自伝と並べてお話ししようと思えるのは、新島よりもほぼ100年ほど前に生まれて、19世紀に入る直前の1797年に亡くなった、一人のアフリカ人の自伝です。オラウダ・イクイアーノという元奴隷のアフリカ人は、亡くなる10年ほど前に、『The interesting Narrative of the life of Olaudah Equiano』（アフリカ人オラウダ・イクイアーノの生涯に関する興味深い物語）という自伝を出版しました。その出版から実に220数年を経た去年、日本語訳が研究社から出ました。18世紀の終わりから19世紀の前半に、アフリカ人が、自伝であれ何であれ本を書いて出版することは、一般的ではなくごく珍しいことではありましたが、他に全くなかったというわけではありません。2、3年前に『アメィジング・グレイス』という映画が公開されたので、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、当時、南北アメリカ大陸でアフリカ人を使役する奴隷制度によって、タバコや砂糖やコーヒーや棉花が栽培されてヨーロッパの消費文化を支えていましたが、非人道的な奴隷制度の廃止を訴える運動も盛んとなりました。イギリスやアメリカ合衆国では、奴隷制廃止を訴える運動家たちがさまざまな活動を展開しましたが、その活動の一つとして、元奴隷であったアフリカ人に自己の奴隷体験を語らせて自伝として出版し、奴隷制廃止運動への世論の喚起を促すことが行われました。オラウダ・イクイアーノの自伝も、こうしたなかで出版された元奴隷回顧録の一つであります。

その自伝によりますと、イクイアーノは、1745年にアフリカの現在のナイジェリアにあたる地方でイボ族と呼ばれる部族の一員として生まれましたが、11歳のときに誘拐されて奴隷商人に売られ、大西洋を渡ってアメリカで奴隷となります。ただし、彼は実は、アフリカ生まれではなく、北アメリカのサウスカロライナで奴隷の子どもとして生まれた、と主張する研究者もいます。歴史的証拠としての自伝資料の信憑性が問題ですが、私の基本的なスタンスは、自伝に何が書かれているかではなく、どう書かれているか、を考えることにありますので、事実の信憑性はそれほど問題ではありません。

さて、イクイアーノは最初、西インド諸島のバルバドス島や北アメリカのヴァージニアの農園で奴隷として働かされるのですが、その後軍人に買われて、海軍とともに大西洋を歩き来し、さらに商人に売られて商船の奴隷として働き、西インドと北米大陸の間を往來します。最後の主人が奴隷制廃止に同情的なクエーカー教徒であったことが幸いし、イクイアーノは21歳のときに、自由の身分をお金を出して買取ることができました。自由の身となった後もイクイアーノは海で生きる道を選び、貿易船に勤務して西インド諸島やアメリカ大陸はもちろんのこと、東は地中海からトルコへ、北はロシアから北極海方面にまで航海します。その間、ロンドンを拠点にして、奴隷貿易と奴隷制度の廃止運動に関与していきます。また、解放されたアフリカ人を、故郷であるアフリカのシエラレオネに移住させて自立させることを目的とした計画にも加わり、さらに、ロンドンでアフリカ人による政治的団体の一員となってアフリカ人の地位向上のために活動しました。こうした運動の一環として自伝を出版しますが、この自伝はよく読まれ、亡くなるまでに9回も版を重ねました。イギリス人の白人女性と結婚し、二人の娘をもうけますが、52歳で亡くなります。

アフリカから誘拐されて押し込まれた奴隷船航海のすさまじい惨状、新大陸での過酷な奴隷労働、突如として売り払われる恐怖、アフリカ人に対する白人の横暴で無茶な態度、自由身分を獲得した後も再び奴隷に戻されるのではないかと恐怖など、奴隷制体験者の立場からの赤裸々な描写は迫力があります。他方で、この自伝は、危険に満ちた航海に関する冒険物語でもありますが、同時に、航海の先々で出会う文化や社会に関する注意深い観察や率直な感想は、スケールの大きい異文化接触の記録としても興味深いものです。加えて、奥深い心の動きの吐露や、鋭い社会批判、厳しい境遇をあるときにはユーモアさえ交えて客観的に描写する姿勢など、文学作品としての多面的なおもしろさは一級品であります。

## 自由とキリスト教

もちろん、始めから終わりまで自伝を貫くテーマは、自由の探求です。理不尽にも誘拐されて奴隷の地位に陥られた境遇から、いかにして自由を獲得し、それを保持し、さらにそれを同胞のアフリカ人に広めるかを追求し続けた自らの足跡が活写されます。最も興味深いのは、奴隷身分からの身体的な解放の過程が、キリスト教徒としての魂の救済と重ね合わせて描写されることです。イクイアーノは、まだ奴隷であった14歳のときにイギリスで洗礼を受けました。ようやく英語も話せるようになり、ヨーロッパ社会への理解も進むにつれて、「自分たちよりもすぐれた人々だと考えるようになった」イギリス人から、「彼らの精神を吸収し、彼らのしきたりに従い」、「彼らのようにになりたい」と強く願います。親切に面倒をみてくれるイギリス人姉妹から、洗礼を受けたいと天国に行けたいと聞かされたイクイアーノは、ウェストミンスター聖マリア教会で洗礼を受けます。

しかし、神への冒瀆も恐れぬふしだらで暴力的な船乗りの世界で、イクイアーノの信仰はいっこうに深まりません。奴隷として身体的自由を奪われていることによって、信仰による精神的自由も得られないことに、イクイアーノは苦悶を募らせます。ところが、21歳のときにようやく自由身分を獲得することになった後は、今度は、身体的自由は得たけれども、精神的自由を得られていないことに苦しむことになります。そこから、真の魂の救済を求める遍歴が始まります。

最初はクエーカーに惹かれますが、その特異な集団的行動に不可解を感じ、次にローマカトリックを理解しようとしても、全く教化されず、さらにユダヤ教徒になろうとしますが、失望します。「来世への不安が日ごとに私の心を悩ませるようになっていき、私は来るべき天罰からどこへ逃れればよいのか分からなかった」（前掲書 筆者訳）。

しかし、元船乗りのある老人との出会いから、メソジスト教会に誘われ、貧しく惨めな生活を送る身分の低い階層の者でも救われる、と説くメソジストの教義に引きつけられて、入信することになります。そして、ついに1774年、スペインへの航海に出た船上で、神の啓示を受けて、イエスの犠牲によって真に自分が救われたことを理解して、次のように言います。

「私が両親のもとから連れ去られた日から今日の日まで、私の身に起こった出来事すべてが神の思召しによるものであることを、今私は自分の目の前で起こっていることを目撃しているかのようにはっきりと理解することができる。私は、神の見えざる手を感じたのだ。私には全く分からなかったが、それが私を導き、守ってくれたのだ。私が軽んじて顧みなかったときにも、主は私に付き添ってくださったのだ。こんな慈悲深さに私のこころは溶け出した。私は自分の哀れで悲惨な状況を見ると、自分は主の恩寵を顧みないなんと罪深い者であったのかと思ひ、涙を流した。今や、このアフリカ人の自分は、イエスキリストによって救われることに喜びを見いだした」（同 筆者訳）。

身体と精神の両方の不自由から自らを救い出してくれる神の御業を確信したイクイアーノにとって、果たすべき仕事はその神の恵みを、未だ不自由な境遇にある人びとにまで届かせることでありました。中央アフリカのカリブ海沿岸に入植地を築こうとする事業に雇われて現地に赴いたイクイアーノは、開拓労働力として導入されたアフリカ人奴隷や現地の先住民インディアンへの布教を志しました。あるいはその後、ロンドンでアフリカ人に対する宣教を行いたいから、是非宣教師としてアフリカに派遣してほしいと教会に嘆願書を出したりもしました。イクイアーノが望んだこうした宣教師的活動は、奴隷上がりの一介のアフリカ人に、主体的な宗教活動を認めるほどに社会は進んでいなかったがために、実質的には実を結ぶことはありませんでした。しかし、神の救いに浴していない、罪深い不自由な人びとを、できればアフリカにまで戻って、キリスト教の信仰に帰依させようとする意気込みには、私は素直に共感を覚えます。

イクイアーノから約100年後、幕末日本の閉塞状況と藩士としてのしがらみからの解放と自由を求めて脱国し、アメリカでの教育をとおして西洋文明の理解に至ろうとし、祖国日本でキリスト教主義に基づく市民の養成を志す新島は、自らの歩みを神の見えざる手の導きによるものであったと自伝に記しました。イクイアーノの自伝は、奴隷の身分から解放され自由を得たアフリカ人が、聖書をいつも手元に置くキリスト教の紳士にまで成り上がった男の姿を描きました。奴隷制が廃止されたらどのような成果が生まれるのかを、世間に示したと言えるかもしれません。アメリカの敬虔なキリスト教徒に向けて書かれた新島の自伝は、鎖国社会の因習から解放され自由を得た日本人が、アメリカでキリスト教文明を学ぼうとする若者の姿を描きました。日本が開国・文明開化されたらどのような成果が生まれるかを、世界に示そうとしたと言えるかもしれません。

2013年7月3日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録